静岡
019

2025年度

S７　小　論　文

2月25日（火）
【前期日程】　情報学部（情報社会学科）　9：30～11：30

注意事項

試験開始前

1　**監督者の指示があるまで，問題冊子，解答用紙，下書き用紙に手を触れてはいけません。**

2　**監督者の指示に従って，全部の解答用紙（３枚）に受験番号を記入しなさい。**

試験開始後

3　この問題冊子は，７ページあります。はじめに，問題冊子，解答用紙，下書き用紙を確かめ，枚数の不足や，印刷の不鮮明なもの，ページの落丁・乱丁があった場合は，手をあげて監督者に申し出なさい。

4　**解答は，すべて解答用紙に記入しなさい。**（下書き用紙と間違わないよう十分注意してください。下書き用紙は採点対象となりません。）

5　文字数制限のある解答用紙の記入については，下記の点に留意すること。

- 書き出しは，一マスあけない。
- 改行後は，一マスあけない。
- 句読点及び括弧等は，それぞれ一マス使う。行の末尾については文字と同じ一マスに含める。
- 小さな文字「っ」「ゃ」「ゅ」「ょ」等はそれぞれ一マスで使う。
- 英数字は一マスに２文字入れてよい。

6　問題は，声を出して読んではいけません。

7　配点は，比率（%）で表示してあります。

試験終了後

8　問題冊子と下書き用紙は，必ず持ち帰りなさい。

1

情報通信技術の発展は，人々の生活の在り方に変化をもたらしてきた。近年では，パソコンやスマートフォン等を活用したテレワーク(在宅勤務)も普及しつつある。

表1から表3は総務省統計局「令和3年社会生活基本調査」(令和3年10月実施)の結果の一部である。この調査は，1日の生活時間の配分や1年間の自由時間における主な生活行動など，国民の社会生活の実態を明らかにすることを目的として行われたものである。表1は，調査当日に仕事があり，うちテレワークをした人口を年齢階級別に表したものである。表2および表3は，テレワークをした人としていない人について，それぞれの生活時間の配分について表したものであり，年齢階級別に示している。

テレワークは人々の生活と社会にどのような影響を及ぼしていると考えられるか。表から読み取れることを指摘しながら，社会的課題や可能性について，あなたの考えを600字以内でまとめなさい。

(配点40％)

表１　年齢階級別テレワークをした人口(2021 年)―平日，有業者

年齢階級	仕事のある日(出張・研修などを除く)		
		うちテレワークをした人口	
	人口 (千人)	人口 (千人)	テレワーク 実施割合(%)
総数	52867	3542	6.7
15～24 歳	3570	109	3.1
25～34 歳	8587	847	9.9
35～44 歳	10969	965	8.8
45～54 歳	13533	837	6.2
55～64 歳	9467	564	6.0
65 歳以上	6742	219	3.2

出典：総務省統計局「令和 3 年社会生活基本調査」(令和 3 年 10 月実施)を加工して作成

注：　表 1 は調査対象となった生活時間の指定日が「平日」で，その日に仕事があった有業者(5286 万 7 千人)についての状況を示したものである。

表2　25～34歳におけるテレワーク(在宅勤務)の実施の有無別
「1日の生活時間の配分」(2021年)―平日，有業者

単位(時間.分)

	(a)テレワーク(在宅勤務)	(b)テレワーク以外	差(a)－(b)
睡眠	8.06	7.25	0.41
身の回りの用事	0.56	1.13	－0.17
食事	1.30	1.15	0.15
通勤・通学	0.03	1.15	－1.12
仕事	8.59	9.06	－0.07
学業	0.02	0.02	0.00
家事	0.36	0.27	0.09
介護・看護	0.01	0.00	0.01
育児	0.13	0.15	－0.02
買い物	0.10	0.06	0.04
移動*	0.05	0.08	－0.03
テレビ**	0.22	0.28	－0.06
休養・くつろぎ	1.30	1.31	－0.01
学習・自己啓発***	0.15	0.04	0.11
趣味・娯楽	1.00	0.32	0.28
スポーツ	0.06	0.03	0.03
ボランティア****	―	0.00	―
交際・付き合い	0.03	0.03	0.00
受診・療養	0.01	0.01	0.00
その他	0.02	0.05	－0.03

出典：総務省統計局「令和3年社会生活基本調査」(令和3年10月実施)を加工して作成

注：　本表の単位は(時間.分)である。例えば，「0.02」であれば「0時間2分」，「1.10」であれば，「1時間10分」と読む。表3に関しても同様である。

備考　以下は表中の項目に関する補足である。表3に関しても同様である。

*：移動(通勤・通学を除く)

**：テレビ・ラジオ・新聞・雑誌

***：学習・自己啓発・訓練(学業以外)

****：ボランティア活動・社会参加活動

表3　35～44歳におけるテレワーク(在宅勤務)の実施の有無別
「1日の生活時間の配分」(2021年)―平日，有業者

単位(時間.分)

	(a)テレワーク(在宅勤務)	(b)テレワーク以外	差(a)－(b)
睡眠	7.18	7.17	0.01
身の回りの用事	1.07	1.18	－0.11
食事	1.29	1.18	0.11
通勤・通学	0.05	1.08	－1.03
仕事	8.50	8.50	0.00
学業	0.00	0.03	－0.03
家事	0.56	0.57	－0.01
介護・看護	0.02	0.01	0.01
育児	0.41	0.18	0.23
買い物	0.07	0.08	－0.01
移動*	0.11	0.09	0.02
テレビ**	0.37	0.39	－0.02
休養・くつろぎ	1.31	1.21	0.10
学習・自己啓発***	0.10	0.03	0.07
趣味・娯楽	0.35	0.18	0.17
スポーツ	0.08	0.03	0.05
ボランティア****	0.01	0.01	0.00
交際・付き合い	0.03	0.03	0.00
受診・療養	0.04	0.01	0.03
その他	0.06	0.04	0.02

出典：総務省統計局「令和3年社会生活基本調査」(令和3年10月実施)を加工して作成

2

次の文章は『テレビドラマは時代を映す』(岡室美奈子著，早川書房，2024年)の一部である。よく読んであとの問いに答えなさい。なお，問題作成のために文章を一部改変した。

(配点 60 %)

テレビ＝オワコン論もささやかれる現在，テレビの意義を改めて考えてみたい。

予(あらかじ)め言っておくと，配信ドラマを否定するつもりはまったくない。近年，さまざまな名作配信ドラマが生み出されていることは事実で，例を挙げればキリがないほどだ。近年に限っても，宮藤官九郎の『季節のない街』(Disney＋)や宮藤と大石静が組んだ『離婚しようよ』(Netflix)，話題となった『First Love　初恋』や『サンクチュアリ　聖域』，是枝裕和の『舞妓さんちのまかないさん』(いずれもNetflix)など，あまりに面白くて一気見してしまったドラマは数多い。テレビよりも潤沢な予算でのびのびと制作できる環境は脚本家や作り手たちにとっても魅力的だろう。視聴者にとっても，選択肢が増えるのは喜ばしいことに違いない。

しかしその一方で，インターネット配信は格差社会の象徴であると私は思っている。NHKやWOWOWのように受信料や定額料金を支払うものは別として，テレビ受像機かスマートフォンがあれば，テレビ番組は誰でも見ることができる。その意味で，テレビは万人に対して平等に開かれた民主的なメディアである。テレビ受像機が高価だった時代はいざ知らず，現在ではスペックにこだわらなければテレビ受像機は一万円台でも購入できる。ネットオークションなら数千円でも可能だ。

それに対して配信は，経済力がものを言う。一つ一つは高額でなくとも，サブスクリプションの料金を継続的に支払える者だけがコンテンツを享受できるからだ。サブスクなら「誰でも」見たい時に見られると考えるのは，その意味で早計である。制作者たちは面白いコンテンツを用意して契約者を増やさなければならないが，視聴者にとっては同時に複数の料金を支払うのは負担が大きいため，見たいコンテンツを求めて配信プラットフォームの契約と解約を繰り返して渡り歩く人もいるはずだ。配信ドラマは見たくても見られない人がいる。格差社会の象徴であると考えるゆえんである。

その点，TVerは偉大だ。スマートフォンさえあれば，期間限定ではあれ無料でかなりのテレビ番組を手軽に見ることができる。テレビ放送との同時配信も始まり，テレビ番組がぐっと身近になったのではないだろうか。

テレビ放送の魅力の一つは，大勢の人が同時に同じ番組を視聴できるということだろう。テレビをTVerや配信で見る人がいかに増えようとも，テレビの同時性は崩れることがない。その証拠に話題のテレビドラマはTwitter(現X)でトレンド一位になったりするが，配信ドラマではいかに人気コンテンツでもそうはいかない。<u>テレビはまだまだ共通言語なのだ</u>。

『silent』(フジテレビ)はTVerの見逃し配信やお気に入り登録が歴代最高記録を打ち立てたのに対

して，視聴率はさほど高くはなかった。しかし放送時にはほぼ毎回 Twitter でトレンド一位となり，多くの若者が配信で見たとしても，テレビという放送メディアの同時性があればこそ人気に火がつき盛り上がったと言える。

テレビ草創期の街頭テレビの時代から，テレビは人びとの共通言語であり続けた。それはテレビが生放送の頃から，本質的にライブ性，中継性を大事にするメディアだったからだろう。SNS によって，視聴者は誰でもテレビの中で起こっていることを「実況」できるようになった。近年は番組や作り手，出演者を批判を超えて罵倒したり誹謗中傷したりするような投稿も増え，SNS とドラマの関係は必ずしも豊かなものとは言えなくなってしまった。しかし SNS には今でも，同じ視聴体験を分かち合い，テレビを共通言語として見知らぬ者同士がつながり合い，一つのコミュニティを形成する豊かな場所にもなりうる。イーロン・マスクの買収により Twitter が X となり，今後どうなっていくのか予断を許さないが，テレビはこれからも私たちの共通言語となり，一緒に振り返ることのできる共通の記憶を醸成していくのではないだろうか。

また，配信ではなく放送であるテレビは，一方向的であるがゆえに，自ら選択したわけではない番組と偶然に幸運な出会いを果たすことがある。テレビをつけたらたまたまやっていた番組に心をつかまれた経験のある人も多いだろう。ドキュメンタリーを偶然見て，自分とは関係ないと思っていた社会問題に関心をもつことだってありえる。基本的に自分が見たいものを見る配信では，そうはいかない。むしろ自ら選んでいるつもりで，レコメンド（おすすめ）機能によって，実は選ばされていることもある。配信文化だけに浸っていると，知らないうちにとても狭い世界に関心が偏る可能性があることは，知っておくべきだろう。

BPO（放送倫理・番組向上機構）というと，テレビ局や制作会社が何かを「しでかした」時に審議して苦言を呈する監視機関という印象があるかもしれない。しかし放送とインターネット配信の違いを考えるとき，この BPO の存在は重要だ。

ネット空間は良くも悪くも自由である。その自由さが放送では困難な冒険的・実験的な新しいコンテンツを生み出すこともある反面，倫理観の欠如したコンテンツが野放しになってしまうのも事実だ。対して，テレビには倫理が求められる。テレビは視聴者が番組を選んで見るだけでなく，好むと好まざるとにかかわらず番組が一方的に流れてしまうという，ある意味で暴力的な側面を持っているからだ。そしてその倫理を支え信頼性を保証するのが，NHK と民放連によって設置された第三者機関たる BPO にほかならない。広大なネット空間に溢れるコンテンツや情報に対して BPO のような機関を設置することはおそらく不可能だろう。だから BPO は，放送が放送であること，テレビがテレビであることの根幹にかかわる存在であると言える。

現在，放送番組制作者たちがもっとも神経を尖らせているのが，X（Twitter）をはじめとする SNS での批判→拡散→炎上だろう。近年，SNS 上で無関係な人びとが一方的に正義を振りかざして特定の対象をバッシングするという行為が目立っている。番組や出演者に対する誹謗中傷や攻撃ともとれる過度な批判は増加する一方で，もはや歯止めが効かないようにも見える。フィクションであること

は前提にも免罪符にもならず，あらゆる間違いを許容しない不寛容な空気が蔓延(まん)していると言っても過言ではない。

この図式への恐怖は，当然のことながら制作現場を萎縮させる。ドラマの主人公たちが常に「正しい」ことや「よい人」であることを求められるとしたら，それはなんと窮屈なことだろう。私たちはみな失敗もするし間違えもする。そして世の中は理不尽なことで溢(あふ)れている。私たちはドラマの登場人物たちの失敗や間違いを反面教師にしたり，彼らがいかに理不尽な仕打ちを乗り越えたかを見て生き方を学んだりしてきたはずだ。表面的な「正しさ」への追従とは異なるフィクションの「倫理」とは何かを，テレビは今，根底から問い直す必要があるのではないだろうか。だから，「放送倫理を高め，放送番組の質を向上させ」(放送倫理検証委員会)，「放送による人権侵害の被害を救済」(放送人権委員会)することを目的とするBPOは，「放送における倫理とは何か」について，これまで以上に積極的に見解を示して世論形成にコミットし，SNS等における過剰なバッシングから制作現場や出演者を守ってほしいと思う。

フィクション／ノンフィクションにかかわらず，テレビ制作者たちはこれまでのノウハウを活かして徹底的な取材や検証によって，BPO案件とならないような信頼できる番組を作り続けるべきだし，BPOは私たちが安心してテレビを見られるように，そして制作者たちが萎縮せずに番組制作ができるように，その存在感を一層発揮してほしい。

テレビがテレビである意味について考えてきたが，テレビはもはやネット配信と無縁ではいられない。テレビならではの同時性を担保しつつ，見逃してもOK，好きなドラマは何度でも見返せるという配信の利点も視聴者は享受すればよいのだと思う。

しかし誰にでも開かれたメディアとして，テレビはこれからも存続してほしいと願っている。そのためには，たとえ予算が潤沢でなくとも，制作者たちはさまざまな工夫や新しいアイデアを凝らして，良質な番組をどんどん制作し続けてほしい。

問 1　「テレビはまだまだ共通言語なのだ」と筆者は述べている。ここで筆者のいう「共通言語」とはどのようなことか，150字以内で説明しなさい。

問 2　あなたはテレビの意義についてどのように考えるか。本文を参考に，あなたが考える理由を挙げながら400字以内で述べなさい。